

課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業（実社会対応プログラム）
公募型研究テーマ 研究概要

課題（研究領域）

共生社会実現をめざす地域社会及び専門家の内発的活動を強化するための学術的実践

研究テーマ名

ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み

責任機関

大阪大学

研究実施期間

平成25年10月～平成27年9月

研究プロジェクトチーム

氏 名	所属機関・部局・職名
研究代表者 浜渦 辰二	大阪大学・大学院文学研究科・教授
【研究1】 グループリーダー	
浜渦 辰二	大阪大学・大学院文学研究科・教授
分担者	
藤本 啓子	患者のウェルリビングを考える会・代表／東神戸病院・緩和ケア病棟相談員
林 道也	〈ケア〉を考える会・代表／倉敷市地域包括支援センター勤務／社会福祉士
岩切 かおり	空堀地区「かいご・かngo塾」運営／訪問看護師
永井 佳子	高齢者外出介助の会・代表／からほりサロン運営
橋本 文雄	朝日新聞厚生文化事業団・大阪地区事務局長
紀平 知樹	兵庫医療大学・共通教育センター・准教授
【研究2】 グループリーダー	
本間 直樹	大阪大学・大学院文学研究科・准教授
分担者	
トマス・ジャクソン	ハワイ大学・哲学科・教授
高橋 綾	大阪大学・CSCD・招聘教員
松川 絵里	大阪大学・CSCD・特任研究員
山崎 尚美	大阪府立池田高校・教諭
皇甫 康子	大阪府池田市立呉服小学校・教諭
金澤 正治	兵庫県西宮市立香櫨園小学校・教諭
張 茜	大阪府箕面市国際交流協会・職員
ヤン・E・リー	韓国江原大学・人文学部・教授
田村 恵子	淀川キリスト教病院・看護師
田中 俊英	NPO淡路プラッツ・代表
【研究1, 2分担者】 稲原 美苗	大阪大学・大学院文学研究科・助教

配分（予定）額

（単位：円）

平成25年度	平成26年度	平成27年度
3,094,000	4,398,000	2,494,000

※平成26年度・27年度については予定額

研究目的の概要

現代社会のなかで円滑な共生をめざすためには弱者を受け入れる社会基盤と精神文化の整備が必要である。そうした課題に対応しながら、あるべき共生のかたちを実現するためには、当該コミュニティの社会福祉、医療・看護・介護、教育などの基盤領域において、それぞれの分野の専門家だけでなく、異なる背景をもつ者どうしが心底からの対話を実現し、ケアと支え合いの精神文化を育みつつ、内発的な仕方で問題解決にあたるのが、なにより不可欠である。少子・高齢化社会のなかでは、勝ち抜き競争型の文化ではなく、ケアと共助・互助という支え合いの文化が大切になった。そしてそれを育てることこそが、リスク社会に対処するための対策になることを、まずは阪神淡路大震災において、さらに東日本大震災の惨劇の経験から、私たちは学んできた。幼児期の虐待、家庭内暴力、学校でのいじめ、犯罪や事故、自然災害などを原因とする精神症状（心的外傷やPTSD）をになった人々への、心底からの配慮と支援もまた、同じケアや互助の文化を醸成することから実ると考えられる。

そうした時代背景と社会的変遷のなかで、現在、災害という非常事態のときのみならず、常時の生活に積極的に関与する実践的な研究手法とスタイルを確立する必要がある。生と知を根本で結びあわせる哲学探究を通して、研究者が心理学あるいは宗教学や芸術学、さらには社会学や政治学や教育学など、人文・社会諸科学の研究者とともに地域コミュニティに関与し、コミュニティ構成員とともに学問知を鍛え直し、ケアと支え合いの文化をコミュニティ自体のなかに育て、個人とコミュニティの双方をエンパワーする臨床型プログラムを移植する。社会の痛苦の現場と学術研究の叡智の現場とを恒常的に結ぶ、そんな臨床的学術研究のしくみが確実に本国に定着することを求め、この研究課題を提案したい。

このような研究課題のもとに、具体的には、大阪大学の「臨床哲学」教室の教員と院生が中心となった「ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」を以下のような内容と方法で行うことを提案する。

研究計画の概要

本プログラム「ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」を、以下の「ネットワーク型」と「実践プログラム型」の二つの研究を通して、相互補完的に展開することを計画する。いずれも、大学院生と実務者・一般市民に開かれた対話の場を活用することで、有機的に連絡しあう予定である。

【研究1】「ネットワーク型研究」：医療・看護・介護の専門職の実務者と一般市民との間を繋ぎながら、ケアを構想し向上させるケアの実践的共同研究を遂行する。2010年より教員と院生からなる「ケアの臨床哲学」研究会を設立し、神戸で医療・看護関係者を中心とした「患者のウェルリビングを考える会」と京都で介護・福祉関係者を中心とした「〈ケア〉を考える会」とを繋ぐ市民活動を大阪にて主催することで、京都・神戸・大阪という三都市を繋ぎながら、かつ、医療・看護と介護・福祉の現場を繋ぎながら、関西圏で「ケアと支え合い」の文化を育んできた。また、大阪市内空堀地区では、介護と看護を繋ぐコミュニティ・ケアを支えている「かいご・かんご塾」や「高齢者外出介助の会」に参加・協力し、大阪の中心地にあるコミュニティにおけるケアと支え合いの文化を育みつつ、そこから「高齢期の豊かな暮らし研究会」（朝日新聞厚生文化事業団呼びかけで始まった様々な分野の実務者の集まり）にも参加するようになっている。

【研究2】「実践プログラム型研究」：「セルフケアのケア」の実践としての哲学対話・哲学相談（コンサルテーション）を、医療・福祉・教育などの現場において活用するため、国内外の実践例をも調査しながら、基礎理論と実践手法を確立する。地域の学校、福祉施設、病院を対象に2006年より試行して来た、哲学相談による組織コミュニティ・エンハンスメントの手法をもとに、教員と院生が組織や地域コミュニティのなかのさまざまな構員・専門職とともに事業に参与しつつ、現場と人々を変革する実践的プログラムを開発する。これらの活動は、たんに専門的知識の提供や学術的助言にとどまるものではなく、実践的な対話によって組織や活動の担い手である各実務者の深いニーズを聴き取り、関与者全員のセルフケアの能力を高め、コミュニティ諸活動のエンパワーメント、パフォーマンスの改善、メンテナンスを目指すものである。